

## 第3章 日本の高校生の新旧課程における能力変化と教員の意識変化

清泉女子大学専任講師 長沼君主  
(現・東京外国語大学専任講師)

### 1. はじめに

「東アジア高校英語教育GTEC調査」は2003年度に第一次調査、2004年度に第二次調査を行い、今回の2006年度調査が第三次調査にあたる。2003年度から2006年度の間には、中学校における新旧教育課程の変化に伴った入学者の質的な変化や2005年度のセンター試験でのリスニングテストの導入など、様々な要因が英語教育に影響をおよぼしている可能性がある。

そこで2003年度調査と2006年度調査に継続して協力の得られた6校のうち、SELHi指定校(p.5参照)であった1校を除いた5校の生徒のGTEC for STUDENTSスコアデータおよび教員アンケートデータを比較し、旧課程生にあたる2003年度の1・2年生(1,241人)と、新課程生にあたる2006年度の1・2年生(1,256人)とでは、どのように能力や特性が変化し、それに対してどのような教員の意識的变化や指導上の変化がみられるかを考察していきたい。

### 2. 経年での生徒の能力的変化

#### 1) 全体傾向

図3-1に示したのが2003年度調査および2006年度調査におけるGTEC for STUDENTS\*1の各技能スコアの平均の推移である。リーディングのスコアは若干上がってはいるもののほぼ横ばいで、あまり大きな変化がみられない(150.6点→156.9点)。それに対して、リスニングでは20点近く上昇し(144.5点→163.9点)、ライティングでも約10点上昇するなど(83.5点→92.3点)、2003年度調査時と比べて大きなスコアの変動がみられる。

\*1 GTEC for STUDENTSのスコア・グレードの詳細は、資料編p.153を参照。GTEC for STUDENTSのリーディング、リスニングは320点満点、ライティングは160点満点である。また、3技能それぞれのスコアによってグレード1(低)からグレード6(高)までの6段階のグレードに分けられる。

図3-1 GTEC for STUDENTS 3技能スコア平均の経年比較

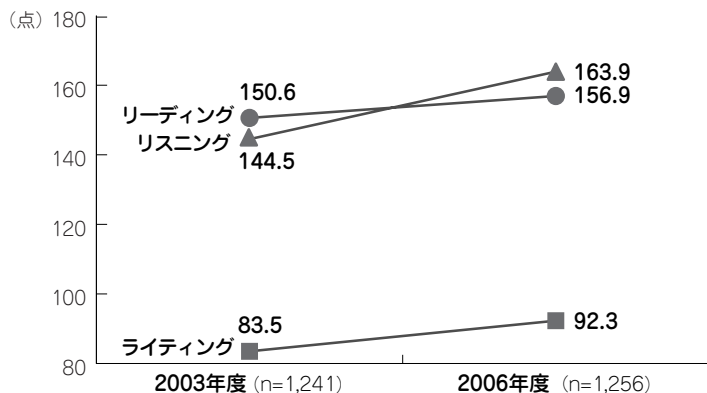
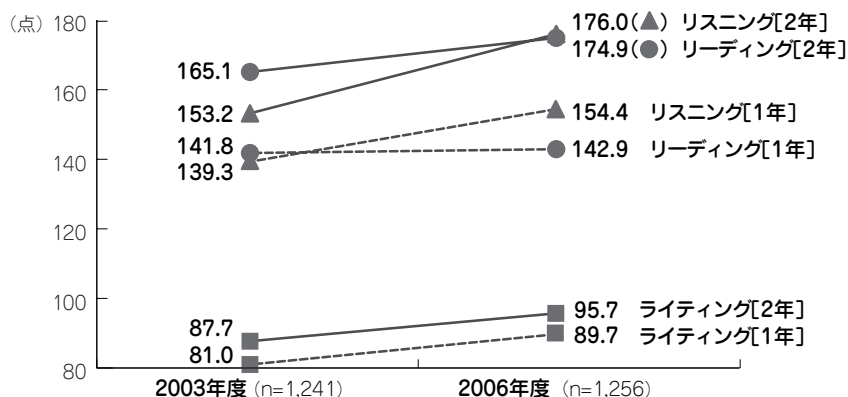


図3-2は図3-1と同じデータを学年ごとにみたものである。リーディングはいずれの学年においても年度間であまり変化がみられないのに対して、リスニングおよびライティングでは2003年度と2006年度で顕著な違いをみせている。リスニングでは、2006年度調査の1年生のスコアは2003年度調査の2年生のスコアとほぼ同じレベルであり、1年生から2年生になるとさらに能力を伸ばしていることがみて取れる。GTEC for STUDENTSのグレードでも、2003年度調査では1年生から2年生にかけて、グレード1から2に上がっているのに対して、2006年度調査ではグレード2から3へと上昇している。

ライティングでも2006年度調査では1年生、2年生ともに2003年度調査のスコアを上回っている。なお、リーディングでは年度間での大きな差はないものの、どちらの年度におい

図3-2 GTEC for STUDENTS 3技能スコア平均の経年比較[学年別]



\* サンプル数：2003年度1年生 (n=771)、2年生 (n=470)、2006年度1年生 (n=707)、2年生 (n=549)。

## 日本の高校生の英語学習

でも1年生から2年生にかけて顕著な伸びがみられ、1年生から2年生でグレード3から4へと能力を伸ばしていることがわかる。

## 2) 技能別の能力分布

## (1) リーディング

図3-3および図3-4はリーディングのスコアとグレードの分布を示したものである。スコア分布をみるとほぼ山が重なっており、2006年度では下位層が少し減ったのが平均スコアの上昇につながったようであるが、上位層に変化はない。このことはグレードの分布からもわかり、グレード1の割合が減り、グレード3と4の割合がやや増えたようである。

図3-3 GTEC for STUDENTSリーディングスコア分布の経年比較

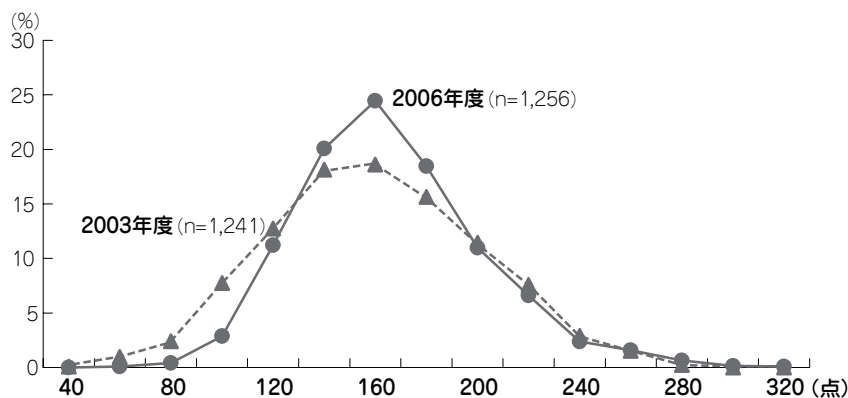
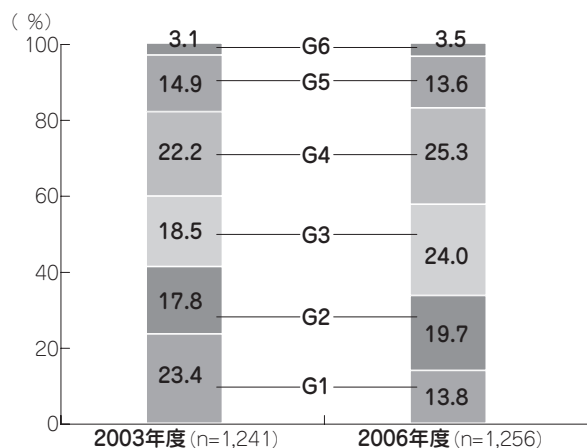


図3-4 GTEC for STUDENTSリーディング・グレード分布の経年比較



## (2) リスニング

図3-5と図3-6はリスニングのスコアとグレードの分布である。スコア分布からは山の形はほぼ同じであり、そのまま右方向にずれていることがわかる。グレードの分布をみると、グレード1の生徒の割合が減り、グレード3以上の中上位層の生徒が増えてきているようである。2003年度調査ではグレード3以上の割合が30.4%と3分の1程度であったのに対して、2006年度調査では52.1%と半数を上回っており、中学校での新課程への移行やセンター試験でのリスニングテストの導入などを受けて、音声重視の指導が増え、リスニング能力の底上げにつながった可能性が示唆される。

図3-5 GTEC for STUDENTSリスニングスコア分布の経年比較

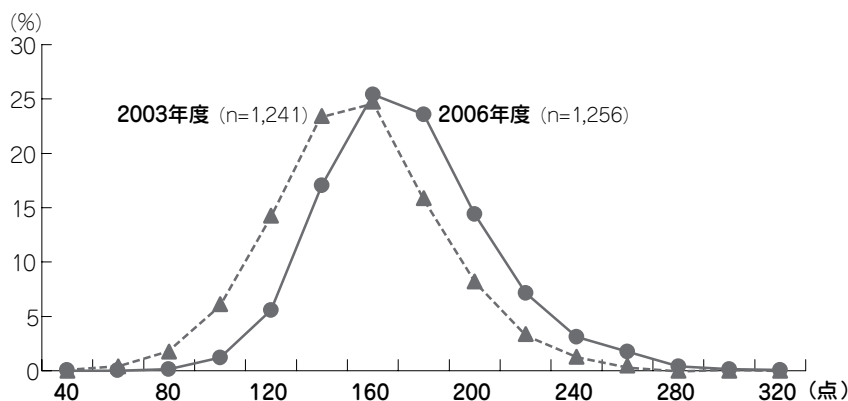
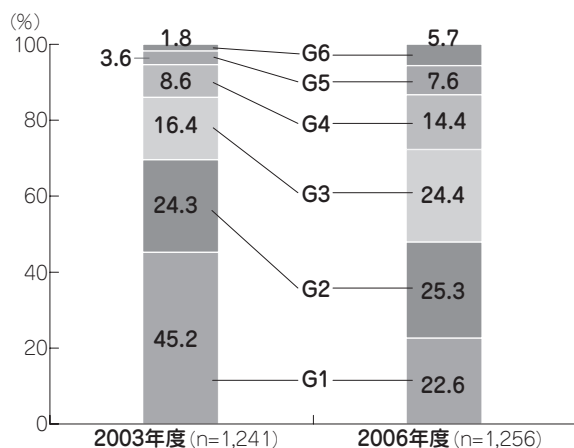


図3-6 GTEC for STUDENTSリスニング・グレード分布の経年比較



## 日本の高校生の英語学習

## (3) ライティング

図3-7と図3-8は同様にライティングスコアの分布とグレードの分布を示している。2003年度調査では80点辺りにスコアが集中しているものの、2006年度調査では80～120点の間に分散しており、2003年度より幅の広い分布となっている。これには2003年度調査ではエッセイ全体に対する印象評価採点だったものが、2006年度調査では観点別のよりきめ細やかな採点基準となった影響も考えられるが、いずれにしてもスコアの分布が全体的に図の右方向にずれているのがわかる。

グレードの分布でも、2003年度はグレード3の層が3分の2を占めていたのに対して、2006年度ではグレード4の層の割合が増えてきており、変化が見られる。グレード3と4との境目は主に「全体的な話の流れが伝わっているか」という点であり、その意味ではよりコミュニケーション的な文章が書ける層が確実に増えていることがうかがえる。

図3-7 GTEC for STUDENTSライティングスコア分布の経年比較

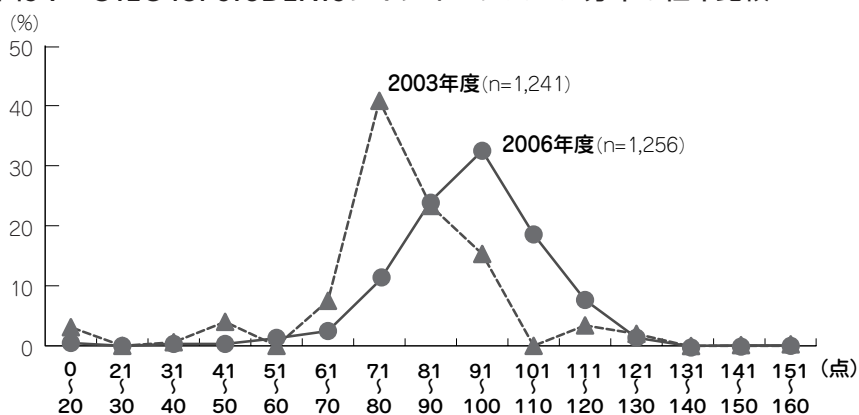
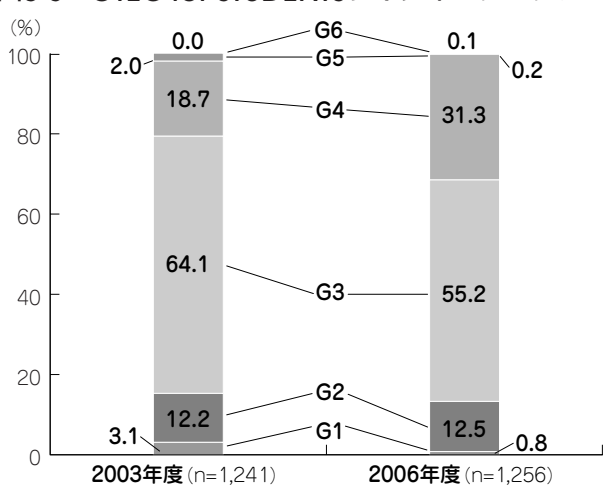


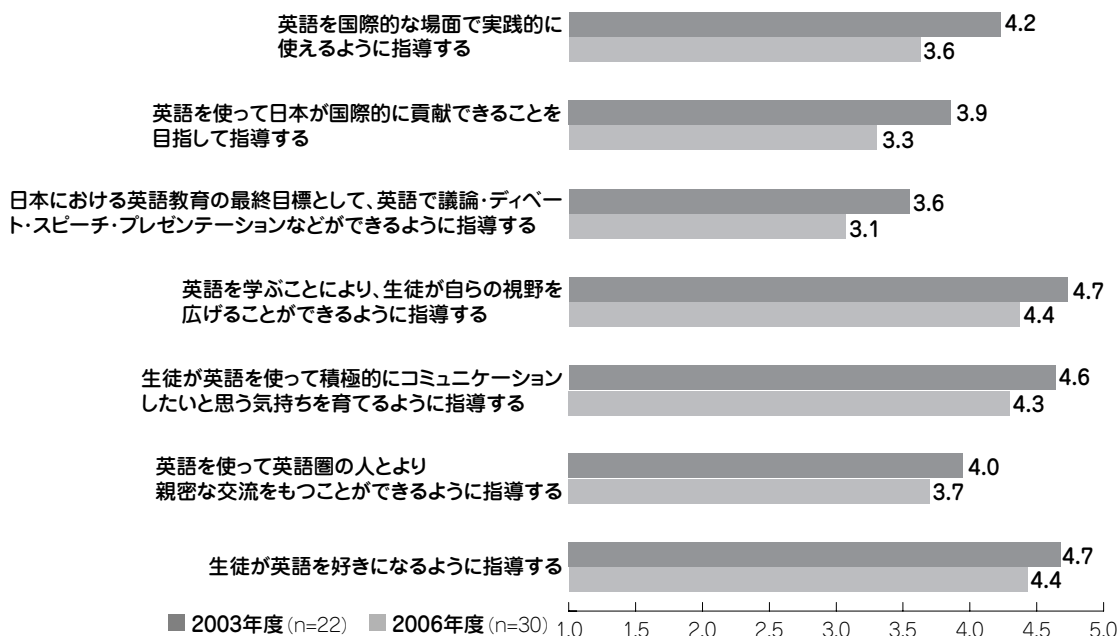
図3-8 GTEC for STUDENTSライティング・グレード分布の経年比較



## 2. 経年での教員の意識・指導の変化

それでは新旧課程の入れ替えの中で、2)の技能別で述べたような能力変化の背後にはどのような教員の意識や指導の変化があるのだろうか。2003年度および2006年度での調査対象校5校における教員（2003年度調査：22人、2006年度調査：30人）のアンケートの結果を比較することにより、回答の変化の傾向をみしてみる。2003年度調査における「指導の理念」や「指導上の配慮」などについての項目を2006年度調査でも一部項目を見直した上で、再度たずねた項目について分析を行った。

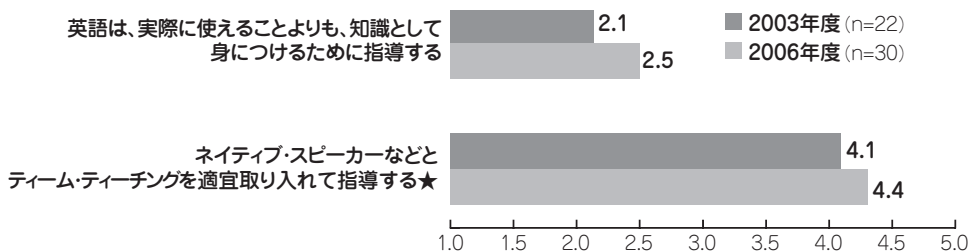
図3-9 2003年度調査における教員の意識の特徴（2003年度＞2006年度）



\*該当項目について「どう思われますか」という質問に対して、「重要だと思わない(1)～「とても重要だと思う(5)」までの5段階で回答してもらったものの回答の平均値。

図3-9に示したのは、2003年度調査での平均が2006年度調査の平均よりも高かった項目であり、平均値の差が大きい順に並べてグラフにしたものである。上位に挙がっているのは、国際的な場面使用を念頭においた実践的スキルの育成である。また、それに伴って大きな開きはないものの、「生徒が英語を好きになるように指導する」といった情意面の育成も挙がっている。積極的にコミュニケーションをしたいという気持ちを育てつつ、実際に国際的に使えるレベルの技能を身につけさせるといった意識のもと、指導が行われていたことが推測される。

図3-10 2006年度調査における教員の意識の特徴（2003年度&lt;2006年度）



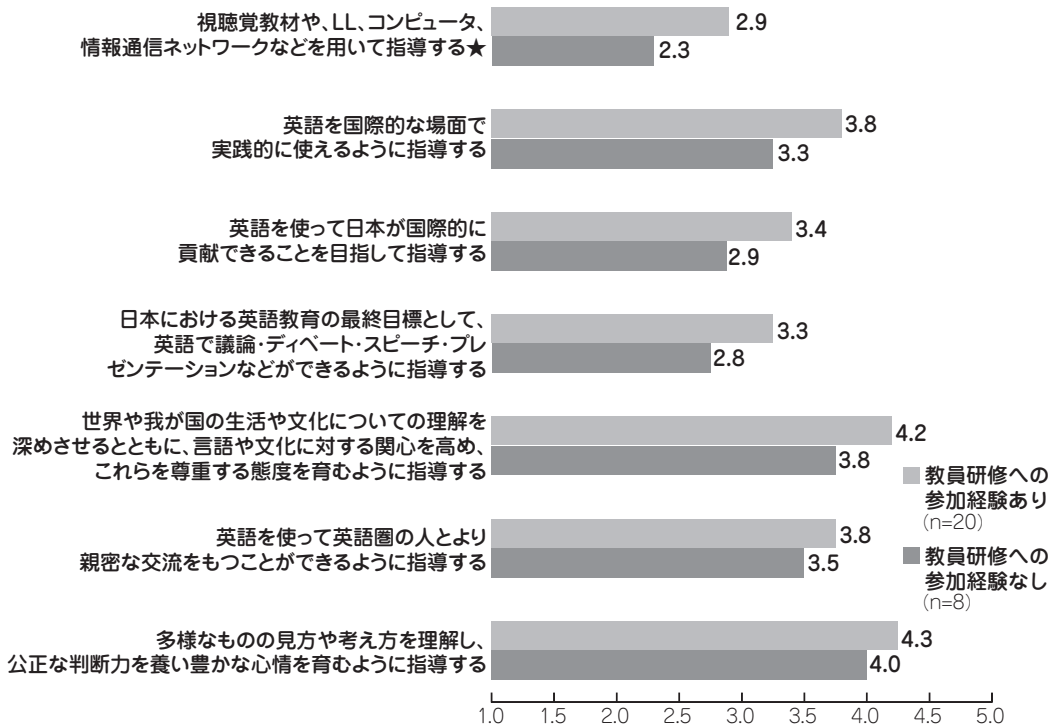
\*該当項目について「どう思われますか」という質問に対して、「重要だと思わない(1)」～「とても重要だと思う(5)」までの5段階で回答してもらったものの回答の平均値（★の項目については、「全く配慮していない(1)」～「十分配慮している(4)」までの4段階で回答してもらったものを5段階として換算したものの平均値）。

図3-10は2006年度調査の平均が、2003年度調査の平均よりも高かった項目をその差の大きい順に並べたものである。2003年度調査では技能面と情意面が重視されていたが、2006年度調査では技能の支えとなる知識的側面が比較的重視されているのが興味深い。第2章でみたように(図2-16)、生徒による教室活動の認知を分析した結果、「統合活動」、「文法活動」、「技能活動」の3つに分かれたが、成績上位層の能力育成には文法面を否定するのではなく、ある程度は文法面も押さえた上で、「統合活動」に重きを置くことが重要であることが示唆されており、教員の意識面からもこのことを裏付ける結果となっている。

図3-11に2006年度調査において過去5年間に教員研修を受けたことの「ある」教員と「ない」教員での意識調査における回答差が顕著であった項目を示す。2003年度調査では過去5年間に教員研修を経験したことのある教員率が27.3%であったのが、2006年度調査では66.7%にあがっている。これには2003年度に始まり、その後5年間にわたり中学と高校の全教員を対象に実施された、「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」の一環としての悉皆研修の影響もあると思われる。過去の東アジア調査では、韓国で教員研修への参加率が高いのに対して、日本では低いとの結果であったが、ここ数年の動きでずいぶん増加しているのがみて取れる。

それでは教員研修参加によって意識面にどのような変化があらわれたのかをみよ(図3-11)と、一つには国際的สังคมで通用するレベルの運用力の育成が挙げられる。2003年度調査時と比べるとそれでも低い値であるが、研修に参加していない他の教員よりも技能面に着目している様子が見える。また、ITやマルチメディアを活かした指導とともに、言語・文化に対する関心や広い視野を養うような指導に重点を置いていることもわかる。このことは、第2章で分析した「総合活動」を支える深い思考を育成する態度にもつながるものと思われる。

図3-11 2006年度調査における教員研修の影響



\* 該当項目について「どう思われますか」という質問に対して、「重要だと思わない(1)」～「とても重要だと思う(5)」までの5段階で回答してもらったものの回答の平均値 (★の項目については、「全く配慮していない(1)」～「十分配慮している(4)」までの4段階で回答してもらったものを5段階として換算したものの平均値)。

### 3. 教員の目からみた入学者層の変化

これまでみてきた経年での生徒の能力変化および教員の意識的变化が、教育課程の変化とどう関連するのか、さらに詳しく探るため経年調査対象校への聞き取り調査の結果\*2とアンケートの自由記述欄への回答結果からみてみたい。

聞き取り調査を行ったところ、新旧教育課程の変化としては、リスニングに強くなったとの声が多く挙げられた。またこのことに加えて、センター試験でのリスニングテストの導入により、リスニング教材が手に入りやすくなったり、演習を行う機会が増えたりといった変化も挙げられており、それらが相乗的に働いて、リスニングスコアの上昇へとつながったということが考えられる。ただし、その反面、文法力の低下を感じているとの声も多くみら

\*2 日本経年調査対象校への聞き取り調査の結果の詳細は、資料編p.102参照。



## 日本の高校生の英語学習

---

れた。

アンケートの自由記述欄への回答においても同様に、リスニング力がついているという回答がみられた一方で(自由記述回答者23人中2人)、語彙や文法力がついておらず、基礎的な力が足りないという意見が自由記述回答者の半数以上に上った(自由記述回答者23人中13人：語彙力不足…6人、文法力不足…4人、基礎知識不足…3人)。

2006年度調査における教員意識の特徴(図3-10)の結果と合わせて考えると、教育課程の変化に伴い、高校への入学者層が基礎的な語彙や文法面の力がこれまで以上に不足しているとの実感から、技能面に加えて、知識面を重視した指導を心がけている実態が見えてくる。

### 4. まとめ

今回の調査結果は限られたサンプルから得られた結果であるため、高校全体の傾向として一般化を行うことは難しいが、生徒の実際のスコアからも、教員を対象とした意識調査の結果からも、新課程生のリスニング力が向上していることは事実であると思われる。ただし、これにはセンター試験でのリスニングテストの導入といった要因の影響もあり、必ずしも中学における教育課程の変化によるとは言えないかもしれない。

第2章で述べたように、教室で行われている英語活動の頻度を分析した結果、高スコア層ほど単なるスキル・トレーニングである「技能活動」を超えた、より深いレベルでの思考力が求められる「統合活動」を行っていることがわかった。「文法活動」も含めたこれら3つのタイプの活動のバランスを、能力層ごとにどのように設計し、全体的な能力の育成をしていくかが、今後求められていくであろう。

そのためには国際社会で通じる英語力の育成といったスキル面やコミュニケーションへの積極的な態度などの情意面を重視するだけでなく、より視野を広げ、深い思考を要求するような指導への教員側の考え方のシフトが必要となる。このことは単に技能や情意を偏重するのではなく、まず伝えるための中身を豊かにすることも意味し、日常的なスキル(BICS)\*3レベルからアカデミックなスキル(CALP)\*4レベルへとつなげていくことが重要となるだろう。

ただし、それには中学段階で不足しているとされた基礎的な学習事項の定着を行い、リメディアル的な手当てをした上で、より高度な活動につなげていくことが課題となってくる。

---

\*3 BICS : basic interpersonal communicative skills

\*4 CALP : cognitive / academic language proficiency

---

能力の足りないところを嘆くだけでなく、中学、高校、大学の一貫した流れを意識した上で、長いスパンでスキルを育成していき、入ってきた生徒たちの得意な点を客観的に把握した上で、それらのメリットを最大限に生かした指導を工夫していくことが必要となる。

すべての技能を均等に伸ばしていくことは難しく、語彙や文法力が足りないのであれば、逆に強みであるリスニング力をベースとした活動を考え、それをどのように他技能の発達へと有機的につなげていくかが鍵となる。この調査が「統合活動」、「文法活動」、「技能活動」のバランスを意識しながら、「技能、情意、思考」の育成を考えていく契機となればと思う。